

衣料用革のアイロン掛けに関する検討

○角田由美子*、今井哲夫**、岡村浩*

(*昭和女大、**都皮技センター)

【目的】革衣料を製作する過程において、裁断後の縫製の準備段階や仕上げのアイロン掛けは、革衣料の形態を安定させ製品の出来映えを左右する重要な工程であるが、アイロン掛けが皮革の性状に及ぼす影響について検討したものは見当たらない。本研究では標準的な牛、豚、緬羊のクロム鞣し革を用いて、アイロンの効果およびアイロン掛けによる性状の変化から、素材に適したアイロン条件について検討を行った。さらに最適なアイロン条件で試料革全体のアイロン収縮率を求め、部位による影響について検討した。

【方法】アイロンの効果は JIS L 1096 の防しわ性試験方法の針金法を応用して測定した。アイロン掛けは工業用アイロンを用いて、JIS L 1057 織物及び編物のアイロン収縮率試験方法の乾熱アイロン法と、試験片の水分を 30% に調湿した霧吹きアイロン法に準じて行った。アイロン掛けによる性状の変化はアイロン収縮率、KES-FB3 の圧縮試験、皮革用ソフトネスゲージ、L*a*b*表色系による ΔE^* と 75° 鏡面光沢度を測定した。

【結果】1) アイロンの効果は乾熱アイロン法では 120°C で認められ、霧吹きアイロン法では 80°C の低温においても認められた。2) アイロン掛けによる性状の変化について検討した結果、霧吹きアイロン法ではアイロン収縮率、ソフト値の低下そして厚さの減少も著しく、乾熱アイロン法よりも素材への影響が大きいことが明らかとなった。3) 半裁革の全面から試験片を採取し、最適なアイロン条件すなわち乾熱アイロン法により 120°C で、試験片の裏からアイロンを掛けて収縮率を求めた結果、試料革の頭部、腹部、腰部等の革の周辺部においてアイロン収縮率は、やや大きくなる傾向が認められた。